様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０４３７４

研究課題名（和文）公的支援からこぼれ落ちる要支援者の実態調査とキャリア発達への中間的支援モデル作成

研究課題名（英文）The study on the survey of actual conditions of supportee who cannot get public support and the buildability of the intermediate support models for them

研究代表者
大塚　類（Otsuka, Rui）

青山学院大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：２０６３５８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は二つある。一つ目が、公的支援に頼れない「見えない生きづらさ」を抱える人々（小学生～社会人）を支える私的支援の実態をフィールド調査により明らかにすることである。二つ目が、当事者のニーズを含みこんだ持続可能な中間的支援モデルを提案することである。
実態調査に基づき、当事者のニーズ（例えば、要支援者を「要」支援者として認識し支援の枠組みに入れていくこと、支援者への支援を自発性に任せるのではなく制度やルールとして周知していくこと等）に即した支援モデルを提案できたことが、本研究の成果である。この成果に基づき、現在、実際の教育現場をフィールドとしてアクションリサーチを実施している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的意義は二つある。一つ目が、虐待・貧困・低学力といった可視化された生きづらさではなく、経済的困窮もないのに学習に向かえない、精神的につながれる相手が誰もいない、といった「見えない生きづらさ」に焦点を当て、実態調査した点。二つ目が、私的支援を自主的に行っている支援者に焦点を当て、支援者を支援する枠組みの必要性を明らかにした点である。
　社会的意義は、見えない生きづらさの要支援者と、彼らを自主的に私的支援している支援者の具体的様相を明らかにし、当事者のニーズを含みこんだ支援モデルの骨子を提案し、実際に教育現場をフィールドとしてアクションリサーチを実施しつつ現場の環境改善に取り組んでいる点である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is (1) to clarify the actual situation of private support for person who suffer from "invisible difficulties" by various field surveys and (2) to propose the intermediate support models for them. This support models contain the actual needs of supporters and supportees.
The result of this research is to propose the support models that meet the actual needs of supporters and supportees based on the various field surveys. The actual need is, for example, (1) to incorporate person who suffer from invisible difficulties as “person who need some support” into the support flameworks and (2) to inform the necessity of making the institutions and rules on the support for supporters who commit the private support.

研究分野：臨床教育学

キーワード：見えない生きづらさ　質的研究　当事者のニーズ　私的支援

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

〈生きづらさ〉が人口に膾炙するようになって久しい。虐待や発達障がいなど、社会的に認知されるようになった生きづらさを、可視化された生きづらさ、すなわち〈見える生きづらさ〉としたときに、以下で詳述するような可視化されない生きづらさ、すなわち〈見えない生きづらさ〉は、見えないがゆえに認識されにくい状況にあった。障がいもなく、両親もおり、経済的困窮もないのに学習に向かえない。成績優秀だが精神的に繋がれる相手が誰もいない。こうした「見えない生きづらさ」は、その理由が本人にも不明確で、外面的には社会適応できているため、 周囲も気づかない。本人自身も、自分が支援を必要するような困難のなかにあることを自覚しにくい。そのため、問題が発覚する時には相当に深刻化し、手の施しようがなくなっているケースも多い。彼らは、公的支援や近年クローズアップされている NPO などの中間的支援の対象にも当てはまらない。彼らを学校や社会にかろうじて繋ぎ留めているのは 、支援者による物心両面での〈私的支援〉、つまり、支援者の意志やボランティアによる支援に他ならない。こうした側面をもつ私的支援は、当然のことながら、支援者のバーンアウトや資源の枯渇と常に隣り合わせである。

こうした問題関心を、申請者らは、大学の教員として学生たちと関わるなかで、そして、公立小学校、公立の定時制高校、私立の高等学校などでフィールド調査を継続するなかで得てきた。〈見えない生きづらさ〉を抱えている人々と、彼らを支えている私的支援を、申請者らの現場感覚に留めるのではなく、実態調査によってその内実を明らかにする必要性を、申請者らは長年感じてきていた。

２．研究の目的

以上の問題関心を背景とした本研究では、〈見えない生きづらさ〉を抱える小学生から社会人までの実態と、彼らを支える私的支援の現状を明らかにすることを目的としている。〈見えない生きづらさ〉であるからこそ、こうした生きづらさを抱えているひとびとは、公的支援の対象となることが難しい。しかし他方で、申請者らが教育実践現場で目の当たりにしてきたように、支援者の自主性にまかされた私的支援にも限界がある。こうした状況をふまえ、本研究では、明らかになった実態に基づく、持続可能な、公的・私的支援の援用可能な利点を含みこんだ中間的支援モデルを提案することも同時に目指すことにした。

３．研究の方法

研究の方法は、フィールド調査とインタビュー調査による実態調査である。

研究代表者である大塚は、本研究実施当初の 2015 年から現在に至るまで、公立小学校での定期的なフィールド調査（週に 1 回）を継続実施している。さらに、本研究継続中に、地方の精神医療関係者、学齢期に不登校等を経験しながら大学入学や就職を果たした〈教育サバイバー〉、〈見えない生きづらさ〉を抱える児童・生徒・学生を支援する立場である学校教職員、訪問医療の恩恵を受けている独居の超高齢者など、〈見えない生きづらさ〉をキーワードとしたさまざまな人々へのインタビュー調査を実施してきた。

研究分担者である遠藤と筒井は、本研究実施当初の 2015 年から現在に至るまで、公立の定時制高校での学習支援という形でのフィールド調査（週に複数回）を継続実施している。さらに、本研究継続中に、遠藤は、発達障がいの生徒を対象とした私立学校や、地方の私立高等学校へとフィールドを拡大している。筒井は、福祉先進国であるデンマークでの 1 年間の研究調

査を実施してきた。

４．研究成果

【研究成果】　研究成果は三つある。研究成果は論文や書籍としてまとめた。

（1）〈見えない生きづらさ〉当事者のニーズの発掘

虐待・貧困・低学力といった可視化された〈見える生きづらさ〉ではなく、経済的困窮もないのに学習に向かえない、精神的につながれる相手が誰もいない、といった〈見えない生きづらさ〉を概念化し、当事者の具体的なニーズを明らかにした。

（2）〈見えない生きづらさ〉を要支援とみなした支援枠組みの提起

〈見えない生きづらさ〉を概念化し、当事者の具体的なニーズを明らかにすることにより、〈見えない生きづらさ〉への支援が必要であることを可視化した。そのうえで、要支援者を要支援者として現状の支援枠組みにつないだり、ピアサポートグループを結成したりといった支援枠組みについて提起した。

（3）支援者の現状に基づく支援者支援の現実的な制度やルールの提起

〈見えない生きづらさ〉をそれと知らず支援している支援者に焦点を当て、現状を明らかにした。〈見えない生きづらさ〉であるからこそ、当事者への支援が支援者の自発性に任されている現状に鑑み、支援者同士の意見交換の場を制度として設けるなど、具体艇な制度やルールを提起した。

【学術的意義】　学術的意義は二つある。一つ目が、〈見えない生きづらさ〉に焦点を当て、さまざまなフィールドや対象者を相手に実態調査した点である。二つ目が、私的支援を自主的に行っている支援者に焦点を当て彼らのニーズを聞くことにより、支援者を支援する枠組みを作り、それをコミュニティの成員に周知する必要性を明らかにした点である。

【社会的意義】　社会的意義は二つある。一つ目は、〈見えない生きづらさ〉の要支援者と、彼らを自主的に私的支援している支援者の具体的様相を明らかにした点である。教育実践現場では、当たり前のように実感されていることではあったが、そこに焦点化し、〈見えない生きづらさ〉とその支援という形で言語化することにより、現場のひとびとにも可視化され、対応のできる問題となった。二つ目は、当事者のニーズを含みこんだ支援モデルの骨子を提案し、実際に教育現場をフィールドとしてアクションリサーチを実施しつつ現場の環境改善に取り組んでいる点である。これは本研究の期間内には実施できなかったが、本研究の継続研究として、現在実施中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 20 件）

（1）大塚類・杉本卓「教育サバイバーの語りに関する現象学的分析」『教育人間科学部紀要』第 10 巻、2019、125－135　査読なし

（2）大塚類・栗田宜明他 2 名「在宅医療患者の語りから探る希望」『教育研究』第 63 巻、2019、73－84　査読なし

（3）Miki TSUTSUI“Individual development model” and “community embedment model”: an examination based on a fieldwork of the job placement at a“disadvantaged non-vocational high school” in Japan『生涯学習とキャリアデザイン』16（2）、2019、187－199　査読なし

（4）大塚類「小学校における自尊感情の基盤の育成に関する現象学的事例研究」『人間性心理学研究』35（2）、2019、131－142　査読有

（5）遠藤野ゆり「自尊感情尺度の俎上にのらない若者に対する対話的支援の効果‐‐学習・キャリア支援ボランティアの経験に基づいて」『生涯学習とキャリアデザイン』16（1）、2018、187－199　査読なし

（6）大塚類・杉本卓「精神医療の連携体制から学ぶ同僚性」『教育人間科学部紀要』第 9 巻、2018、95－106　査読なし
（7）大塚類「教員を目指すみえない障害当事者についての現象学的分析」『教育研究』第 62 巻、2018、87－102　査読なし
（8）遠藤野ゆり「視線恐怖感を抱える青年期男性にとっての教室空間の生きづらさ――「可能性」と「蓋然性」を手掛かりとした現象学的考察」『人間性心理学研究』35（2）、2018、143－154　査読有
（9）遠藤野ゆり「社会的養護と未完の『自立』――唯一無二の存在として他者から受容され生きること」『世界の児童と母性』第 82 巻、2017、28－31　査読なし
（10）大塚類「「自己基盤が脆い」患者へのアプローチ」『日本透析医学会雑誌』50（3）、2017、188－189　査読なし
（11）筒井美紀「公立高校定時制課程における『人間と社会』の時間を活用した主権者教育の実践――大学生との協働学習をふり返る」『生涯学習とキャリアデザイン』14（1）、2016、115－127　査読なし
（12）遠藤野ゆり「私は『本当の私』をわからないということ」『看護教育』57（4）、2016、306－312　査読なし
（13）遠藤野ゆり「社会の中で自分をわかるということ」『看護教育』57（5）、2016、386－392 査読なし
（14）遠藤野ゆり「わかり合えないことの由来――多様な知覚と認知」『看護教育』57（6）、2016、472－477　査読なし
（15）遠藤野ゆり「物語としての自己」『看護教育』57（7）、2016、564－569　査読なし
（16）遠藤野ゆり「生きづらさの研究　ひと（他者）にわかってもらえないということ」『看護教育』57（7）、2016、138－144　査読なし
（17）遠藤野ゆり「悲哀をめぐる研究：虐待をしてしまう母親の回復支援に向けて」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』13、2016、157－169　査読なし
（18）大塚類「質的研究として体験を言語化すること」『人間性心理学研究』33（1）、2015、57－63　査読なし
（19）大塚類「エピソード研究で「現象学」を使う意味」『看護研究』48（6）、2015、571－574 査読なし
（20）大塚類「質的研究の正当性：エピソード研究の妥当性とは何か」『看護研究』48（6）、2015、575－577　査読なし

〔学会発表〕（計 7 件）
（1）大塚類「児童養護施設で育つ幼児が他者支店を獲得していくあゆみ：臨床現象学的事例研究」日本乳幼児教育学会第 28 回大会、2018
（2）遠藤野ゆり「定時制高校における生徒間の『異質な他者』受容プロセスについて――インクルーシブ教育の実現に向けた事例検討」日本人間性心理学会第 37 回大会、2018
（3）大塚類・遠藤野ゆり「辛さを抱える支援者への支援可能性――専門学校教職員の語りの現象学的分析」日本人間性心理学会第 36 回大会、2017
（4）遠藤野ゆり・大塚類「コミュニケーションに難のある若者の他者関係の変化――定時制高校のある生徒が就労に至るまで」日本人間性心理学会第 36 会大会、2017
（5）遠藤野ゆり・大塚類「物語論に基づく現象学的解釈」日本子ども虐待防止学会第 22 回学術集会おおさか大会、2016
（6）遠藤野ゆり・大塚類「恋愛回避的な若者の「見えない生きづらさ」――自尊感情に着目した考察」日本人間性心理学会第 34 回大会、2015
（7）大塚類・遠藤野ゆり「公的役割を超えて私的支援を行うことに不可避なつらさ――時間の観点から児童養護施設職員の語りを考察する」日本人間性心理学会第 34 回大会、2015

〔図書〕（計 1 件）
（1）小山真紀・大塚類他 7 名『生きづらさへの処方箋』ナカニシヤ出版、2019、pp.154

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：遠藤　野ゆり

ローマ字氏名：ＮＯＹＵＲＩ　ＥＮＤＯ

所属研究機関名：法政大学

部局名：キャリアデザイン学部

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：20550932

研究分担者氏名：筒井　美紀
ローマ字氏名：ＭＩＫＩ　ＴＳＵＴＳＵＩ
所属研究機関名：法政大学
部局名：キャリアデザイン学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：70388023

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。